

陳 述 書

平成30年3月28日

東京地方裁判所民事第26部合議1係 御 中

氏 名



1 はじめに

私は、平成14年11月から平成29年3月まで信州大学医学部教職員（准教授、特任教授）として在籍しました。

主な専門は、腫瘍学、新規AIDSワクチンの開発です。これまで、同大学医学部のほか、国内研究機関（東京大学、国立がん研究センター等）及び海外研究機関（マサチューセッツ工科大学、ハーバード大学医学部等）で、感染症（HIV等のワクチン開発、HIVプロウイルスの発現機構の分子生物学的解明）や、婦人科子宮間葉系腫瘍（子宮平滑筋肉腫、子宮平滑筋腫：新規バイオマーカーの探索）の研究開発を行いました。

平成25年11月頃、塩沢丹里先生（以下、「塩沢先生」といいます。）が主宰する、信州大学医学部医学科産科婦人科教室のセミナー室で行われたプログ्रेसミーティングに私が参加して自然物質（ウコン、ワサビ抽出物質）の抗腫瘍効果について発表したことがあります。その後、塩沢先生から、子宮頸がんワクチンの副反応について、マウスを使って実験してみないかと誘われました。これが、私が池田修一先生（以下、「池田先生」といいます。）の研究班（以下、「池田班」といいます。）の活動に関わることになったきっかけです。

もっとも、この当時、私は免疫学教室の准教授であり、産科婦人科教室の医局員でなく池田班の班員でもなく、班会議等の池田班の集まりに参加したこともありません。塩沢先生の研究の一部を、同大学医学部産科婦人科教室の医局員とともに手伝う立場でした。したがって、池田班の研究内容について、私が直接、池田先生と打ち合わせたり、データのやり取りをすることはありません。私と医局員で行った実験結果は塩沢先生に報告し、塩沢先生から池田先生に報告される関係にあります。

2 本件マウス実験について

塩沢先生からは、動物に子宮頸がんワクチンを打った場合に特異的な反応が出るかどうかをためしに見てもらえないかとの大まかな指示があった程度でした。どのような動物を使用して実験を行うかは、私がジャパンワクチン社（子宮頸がんワクチン サーバリックスの日本代理店）より資料を取り寄せるなどしてジャパンワクチン社の担当員と一緒に分析して考えました。具体的には、私とジャパンワクチンの担当員は北里大学の研究グループの研究内容や、サーバリックスという子宮頸がんワクチンの製造会社であるグラクソスミスクライン社の研究報告も参考にして検討していました。

北里大学の研究グループは、野生型の BALB/c マウス（以下、「野生型マウス」といいます。）にサーバリックスを接種した直後の急性炎症応答について検討していました。そこで、私は、北里大学の研究方法とグラクソスミスクライン社の研究報告を参考にしてジャパンワクチン社の担当員と一緒にマウスへのサーバリックス投与量などの実験手法を決定しました。つまり、私達のマウスを用いた実験手法は、グラクソスミスクライン社の研究方法に準じています。医学的に、自己免疫疾患の素因を有する方において、サーバリックス接種が、慢性疾患であるギラン・バレー症候群とナルコレプシーの発症の誘発につながる可能性がある」と指摘されていました。

サーバリックス接種による臨床学的有害事象は、接種後しばらく経過した後に認められることより、私は、実験用小動物を用いた慢性疾患の発症に関して検討を行うことにしました。私は、自己免疫疾患の素因を有する NF- κ Bp50 欠損マウスをよく知っていたことから、まず、このマウスにサーバリックスを接種して、歩行障害や行動異常が見られるかを約1年間観察することとし、平成26年3月から始めました。しかし、優位な行動異常や歩行障害等の表現が認められなかったことから、次に、サーバリックス接種により、中枢神経細胞を認識する自己抗体の誘導が認められるかの検討を行いました。

当初、サーバリックスを接種したマウスと、コントロールマウス（生理食塩水を接種したもの）について、それぞれのマウスから血清を採取して、野生型マウスの脳組織切片に振りかけて、血清中の一部の抗体が正常な脳の海馬の中枢神経細胞を認識すると緑色を呈する免疫組織科学染色法で検討を行いました。その結果は、塩沢先生が、平成26年度の池田班の研究報告の中で報告されたと思いません。

平成26年度の池田班の班会議で塩沢先生の発表をお聞きになった池田先生から、サーバリックス以外のワクチンを接種した場合と比較検討してみてもどうかというコメントがあったため、平成27年2月上旬からは、インフルエンザワクチン、B型肝炎ワクチンをそれぞれ接種したNF- κ Bp50欠損マウスについての検討も行いました。

ウェッジの記事(甲1、43頁)では、ワクチンを接種したNF- κ Bp50欠損マウスから採取した血清を正常なマウスの脳切片に振りかけたのでは、ワクチン薬剤がBBB(血管脳関門)を越えることにならないと書かれていますが、私どもはワクチン薬剤がBBBを越えるかを観察する目的で本件実験を行ったものではありません。被験者が自己抗体を有しているかどうかを見るために、被験者から採取した血清を、別の正常な組織と反応させて自己抗体の有無・程度を検査することは、医療機関で行われている通常の検査方法です。大江さんや村中さんとの面談でもそのこととお話ししていますし(乙7の2の反訳文28頁)、私が彼らに渡した論文(甲25)でも、この検査方法でなされたことが説明されています。ところが、記事(甲1、43頁)では、私の説明が理解されなかったのか、私が全然違いますよと否定したにもかかわらず、ワクチン薬剤がBBBを越えて脳に何らかの影響を及ぼしているかが最大の争点となっていると書かれていました。

ワクチンを打ったマウスの脳組織自体の観察は、本件実験の目的ではなく、参考に観察した程度です。面談でも説明しましたが、NF- κ Bp50欠損マウスはもともと加齢(月齢6ヶ月以上経過)とともに神経変性が起きやすいマウスで、ワクチンを接種しなくても、脳の海馬に変性が認められる可能性があります。つまり、私達は、ワクチン接種により、同マウスにおいて優位にかつ早期に自己免疫様疾患が認められるか検討を行いました。ワクチン接種したマウスとそれ以外のマウスとで有意な違いが見られるかどうかは、相当な匹数(1群20匹程度)を用意して観察する必要があります。本件実験のように、単年度の研究で限られた予算で行う各群5匹程度の予備的な実験では、優位な実験結果を得ることは不可能です。本件実験でワクチンを打ったマウスの脳組織を観察したからといって、ワクチン接種によって脳組織に異常が見られたとも、見られなかったともいうことはできません。

3 プログレスミーティングについて

本件実験を実施する上で一番の問題は、信州大学医学部附属病院産科婦人科が

長野県内で高度医療を提供できる産科婦人科として、高リスクの出産、妊婦さんの交通事故による緊急手術対応、週数日間の長野県内の提携病院での診療や日当直など、日々、様々な患者さんの対応で多忙を極めていることから、その医局員らと一緒にいる点で、時間のやりくりがとても大変だったことです。

本件実験の進捗状況については、月1回、朝8時から1時間程度行われるプログレスミーティングで、塩沢先生を含む医局員全員と進捗状況を共有していましたが、平成27年12月25日夕方頃、塩沢先生から、同月28日のプログレスミーティングに池田先生が出席されることを聞き、本件実験の内容を初めて聞く池田先生に向けてプログレスミーティングの資料を補強し、合計49枚のスライド（甲17）を用意しました。

前述のように、本件実験は多忙な医局員らと時間をやりくりして行った予備的な実験の段階であり、私は、免疫学教室の業務である講義や自分の専門領域の研究を続けながらその合間に上記資料を作成していました。これらのスライドは、正式な学会発表向けではなく、研究の進捗状況と成果を厚労省研究班の班員と共有し、班員同士お互いアドバイスをおこなうためのものです。

例えば、ウェッジの記事に掲載された本件スライド（甲5）の共焦点レーザー顕微鏡の写真のスライドの作成経緯を説明しますと、これは免疫組織科学染色法による染色結果の画像をひとつひとつ撮影して並べたものですが、各ワクチンを接種したNF- κ Bp50欠損マウスから採取した血清を野生型マウスの脳切片に振りかけて反応を見るための所定の作業工程を経て、さらにその結果を共焦点レーザー顕微鏡で撮影するための設定や撮影時間を含めると、全ての画像を撮影して並べるのに、合計で9時間程度かかっています。

信州大学の本調査委員会による聴き取りで、私が、免疫組織科学染色法による画像スライドをマウス1匹分しかできなかったことについて、複数のNF- κ Bp50欠損マウスの血清サンプルがあるならその全てについて免疫染色による画像を撮影すればよかった等と指摘されましたが、私にとっても医局員らにとっても、本来の業務が多忙を極める中での実験でしたから、そのような時間的な余裕はとてありませんでした。

同月28日のプログレスミーティングの後、塩沢先生から、この資料（甲17）を渡してほしいとの指示があったので、この資料（甲17）をインターネットの「宅ふぁいる便」で塩沢先生へ送信しました。この資料は塩沢先生の研究資料、ひいては池田班の研究資料としていただいていたのでよいものですから、池田先生に渡し

ていただいても全く問題ないものです。私から池田先生にこの資料（甲17）を含む本件実験に関する資料を直接渡したことはありませんが、塩沢先生が池田先生に資料の全部又は一部を渡すことは当然あり得るものと考えていました。

4 村中さんの取材依頼があるまで

池田班において、班会議や合同班会議、その後の成果発表会が行われていることはそのときどきの時点で知っていましたが、成果発表会がマスコミに公開でなされていたことは知りませんでした。また、私も産科婦人科教室の医局員も多忙のためTBSのNEWS23も見ていなかったもので、どのような内容が報道されたのか、具体的には知りませんでした。放送後も産科婦人科教室内でも特に話題になりませんでした。

成果発表会の後、池田先生が、テレビでマウス実験のことが取り上げられたから、申し訳ないけれども、塩沢先生のところにお問い合わせがあるかもしれないという話をされたと聞きましたが、私のところにマスコミから問い合わせがくることもありませんでした。

5 村中さんらとの面談に応じるまで

(1) 宮川先生からのメール

平成28年3月28日、旧知の宮川剛藤田保健衛生大学総合医科学研究所システム医学研究部門教授（以下、「宮川先生」といいます。）から久しぶりにメールをいただき、本件実験について尋ねられ、村中さんというジャーナリストが私に会いたいと言っていることを伝えられました。

宮川先生と共同研究のお話しする過程でも、宮川先生から、幾度も、村中さんがマウスの実験について話を聞きたいと言っているとお聞きしました。しかし、平成27年12月28日のプログレスミーティング時点で、私は、産科婦人科教室の医局員ではなく、池田班での塩沢先生の研究は、責任者である塩沢先生と一緒に実験を行っている医局員の了解なく、私がジャーナリストにお話しできることではないので、お断りしました。

それでも、宮川先生は、私のインタビューを村中さんから強く求められたようで、本件実験のデータについて、「一般の方々にかなり誤解されて伝わっており、それが強い社会的インパクトを与えているのは間違いないようです」「プレリミナリーデータを事実であるように誇大に発表しているのに具体的説明を求めら

れても答えないということになってしまい、研究者コミュニティ全体にも批判がなされる」などと書かれていました（丙69、3枚目の平成28年5月12日付けメール）。

平成28年5月頃、同年3月の池田班の発表について、マウス実験のことが話題になっていると信州大学内で聞いたことはなく、マスコミからの取材もありませんでしたから、宮川先生からのメールを不思議に思いました。長年の友人である宮川先生がひどく心配してくれている様子でしたから、もし、マウス実験について何か説明したほうがよいことがあるとすれば、実験を担当した私が説明することがよいのだろうと考えたこともあります。しかし、医局員や塩沢先生が言うとおおり、何らかの説明をする場合は、対外的に話をされた池田先生がまずお話しされるべきだと思いました。

私が取材を断るたびに、宮川先生からのメールの内容は深刻なものになっていき、ついには、次のように、私の研究や私個人について、かなりネガティブな意見が集まっているようだから、村中さんのインタビューに応じないとかなりまずい状況になるという、私を脅すようなメールまで届きました。

「村中先生は、先生が厚労省から発表されたマウスの研究について、僕でもよく名前を知っているような極めて著名な複数の先生方と、科学的な側面、社会的な側面の双方から詳細なディスカッションをされていらっしゃるようです。先生のご研究（と先生ご自身）についてかなりネガティブなご意見が集まってしまっているようで、かなり危機感を覚えました。

先生がインタビューにおこたえになれば誤解は解けるのではないかと思います。このままではかなりまずい状況になりかねないと危惧しております。」

「村中先生は国際医療福祉大学の広報窓口を通した先生へのインタビュー依頼を、複数の研究者の連名での申し込みとして検討されているようです。おおごとになる前に、先生よりきちんとした説明・ディフェンドをされるのがよいのではないのでしょうか。」（丙69、2枚目の同年5月27日付けメール）

この頃には、村中さんが、子宮頸がんワクチン接種推進派の立場で、池田班の発表内容を攻撃する記事を出していることもわかっていました。そこで、私は、同年4月から産科婦人科教室の特任教授として医局員になったこともあり、信州大学産科婦人科教室はワクチン接種に反対していないことを説明しました。

それでも、宮川先生は、次に村中さんが出す記事は私に関連した内容が中心になるらしいことや、「根掘り葉掘り、先生の大学関連でのこともお調べになっていらっしゃるって、既に国際医療大学の理事クラスともお話しをされていらっしゃるようで、たいへんな状況になっている」と私に知らせてきて（丙69、1枚目の同年5月28日付けメール）、本当に困りました。

また、村中さんが、私宛ての電話で取材に応じるよう迫ることもありました。そのとき、「池田先生が信州大学医学部を退職する」という、私も塩沢先生も知らない情報を村中さんが話すので、なぜ村中さんが学内でさえ公になっていない人事情報を知っているのか、信州大学内部の誰かと繋がっているのだろうか、恐怖心を抱きました。

（2）小西先生からのご連絡

その後、信州大学医学部産科婦人科の前の教授で、私が大変お世話になっており、私の指導教官である小西郁生先生（以下、「小西先生」といいます。）から、久しぶりにメールをいただきました。私は、小西先生に救いを求めたい一心で、私と塩沢先生が困っていることをお伝えしました。

小西先生と電話でお話しした際、小西先生から、NF- κ Bp50 欠損マウスを用いた実験結果に研究捏造の疑惑が生じているとお聞きして、なぜ研究不正の疑惑が生じるのだろうかと驚きました。そして、研究不正の疑惑を払拭するために、NF- κ Bp50 欠損マウスを用いた一般的な実験手法を村中さんにお話しして記事にしようといふことを小西先生から提案され、了解しました。小西先生は、塩沢先生の上司にあたる方ですから、小西先生が勧めることであれば塩沢先生も了解されるはずだと考えました。その後、私が、小西先生とのお話の内容を塩沢先生に伝えたところ、塩沢先生も賛同してくれました。

6 面談で

（1）面談でお話しするに当たっての私の考え

面談に応じるといっても、私はこの研究の担当者として対外的に名前が出る立場になく、塩沢先生の依頼で医局員と一緒にマウス実験を行った立場に過ぎませんから、対外的に未発表の内容について詳しく説明すべきではないと考えていました。

したがって、村中さんらとお話しするとしても、池田先生が発表された内容のうち、NF- κ Bp50 欠損マウスを使った実験の基本的な知識、例えば、NF- κ Bp50

欠損マウスの特性や、一般的な実験手法、池田先生の発表資料の見方などについて説明すれば、研究不正がないことはわかっていたはずだと思います。

本件スライドを含む池田先生の発表資料は厚労省ホームページで見て知りましたが、塩沢先生の研究部分の発表に関して使用されたスライドは、私が真正に作成した元のスライドに基づいており、改ざんも捏造もありません。本件スライド中の「沈着」という書き方は的確な表現ではないと思いましたが、事実ではないことが書かれているとは考えませんでしたし、捏造とも考えませんでした。なお、この当時、私はこの説明書きを塩沢先生が書きことは知りませんでした。私がおそのことを知ったのは、信州大学の本調査のときです。塩沢先生が、この説明書きは塩沢先生が書かれたことを私に直接お話しされ、私は非常に驚きました。

(2) 面談でお話ししたときのこと

平成28年6月3日お昼12時30分頃、取材場所として指定された東京駅近くのレストランに出かけると、大江さんと宮川先生が来ており、村中さんは少し遅れるとのことでした。

面談は、昼食をとりながら、1時間程度、本件実験について、実験に用いたマウスの数やワクチンの投与量、なぜNF- κ Bp50欠損マウスを用いたかについて、大江さん、村中さん、宮川先生との雑談のような感じで行われました。途中、旧知の知り合いである私と宮川先生との専門的な会話になった場面もあり、特に、医師ではない大江さんにとって、内容がわからないやりとりもあったかもしれませんが、そのような内容については、後日に宮川先生が大江さんや村中さんに説明するのだろうと思いました。

村中さんが来る前に、私が、本件スライド(甲5)について、「沈着」ではないと述べ、池田先生がこの説明書きを書いたものと思って発言した部分があります(乙7の2、7～8頁)。このときは、池田先生の発表資料であることから池田先生が書かれたのだろうと思っていました。

また、大江さんから、NEWS23の放送で、池田先生が、マウス実験の結果について、「明らかに脳に障害が起きていて」「ワクチンを打った後、こういう脳障害を訴えている患者の共通した客観的所見が提示できている」と述べたと言われましたので(同12頁)、マウスの実験結果からそのようなことは言えないと話しました。当時、NEWS23の放送内容は知りませんでしたし、また、成果発表会をマスコミに公開していたことも知らなかったため、予備的な実験結果で学会発表段階にないものをマスコミに公表して、本件実験から子宮頸がんワクチン

の副反応としての脳障害について、断定的なことを池田先生が述べたとすれば、たしかによくないと思いました。

本件実験の手法について、実験で用いた NF- κ Bp50 欠損マウスや実験手順についてまず一通り説明しましたが（同 22～28 頁）、村中さんは、通常の自己抗体の検査方法をご存知なかったようで、本件実験が、ワクチンに含まれるアジュバントが BBB を越えて脳に沈着するかを見たものかと勘違いしておられました（同 28 頁）。

そこで私は、今回の実験は、ワクチンを打ったマウスの脳の組織変性を見たものではないことを説明しました（同 30 頁）。大江さんからは、ワクチンを打ったマウスの脳を見ていないのかを尋ねられたので、一応見たけれども、そもそも、NF- κ Bp50 欠損マウスは脳の海馬に変性が起きやすいから、匹数が少ない状態でワクチンを打った NF- κ Bp50 欠損マウスの脳の海馬とそうでないものとの比較しても違いがわからず、パイロット実験として不向きであること、違いを見ようとするなら、20、30 匹程度の数で観察しないとわからないから、今回はやっていないことを説明しました（同 31 頁）。

続けて、NF- κ Bp50 欠損マウスの特性として、神経変性が起きやすいマウスであることから、子宮頸がんワクチンを打ったマウスの血清でなくとも、自己抗体ができ、免疫染色の結果、緑色に染まる部分があることを説明しました。このことは、脳の海馬に限らず、網膜についても同じことですから、海馬に限定して説明したわけではありません。何も接種しない月齢 5 カ月の NF- κ Bp50 欠損マウスから採取した血清を野生型マウスの網膜組織に添加したところ、網膜組織の網膜視神経細胞を認識すると思われる抗体が認められたことが書かれた論文（甲 25）を、この日、村中さんらに渡したのも、NF- κ Bp50 欠損マウスの特性を、既に公表されている資料に基づき説明するためです。面談でも、私がこの論文について説明している部分があります（乙 7 の 2、34 頁～35 頁）。

この論文についての説明を聞いた宮川先生が、「網膜も中枢神経系の一部だと」（同、36 頁）と話しているとおりに、網膜と脳の海馬はいずれも中枢神経系で、中枢神経系の神経回路の形成や神経細胞の状態を観察するために、海馬と網膜の両方に着目することは何らおかしいことではありません。プログレスミーティングの資料（甲 17）に網膜と海馬のそれぞれの免疫染色の結果があるのもそのためです。面談で私が緑色に染まると述べたのも、海馬だけでなく、網膜も含めた説明であり、少なくとも宮川先生はそのことは理解していますから、大江さんら

にはすぐ理解できなくとも、後で宮川先生から説明を受けて理解していただけるものと思いました。

大江さんから示された本件スライド（甲5）について、「例えば、緑色のこれとか出るんですよ」（乙7の2、43頁）と私が述べたのは、本件スライド中、子宮頸がんワクチン以外のワクチンについて、「血清（自己抗体）」のところの右上部分が少し緑色に染まっているものを指したものだと思います。このスライドに使われた写真が、プログレスミーティングで何枚も出した写真の1枚と述べたのも（同、44頁）、海馬や網膜の染色結果について出した複数の写真の中の1枚という意味です。本件スライドのほかに、マウスの脳の海馬について、本件スライドと同じ構図で、自己抗体を緑色に染色して撮影した画像が「何枚もある」という意味ではありません。

そして、池田先生が、班員が作成したスライド資料等から、成果発表会で説明するために一部のスライドをピックアップするのは当然のことであって、不正行為ではありません。

（3）捏造や研究不正があると述べたことはないこと

私は、面談で、池田先生や塩沢先生が不正行為をしたと述べたことはありませんし、私が行った実験過程に不正があったと述べたこともありません。ウェッジの記事（甲1）を読んだ直後に私が宮川先生に送信したメール（丙38、9頁）で、「捏造ではなく、誤った理解」と書いたのも、捏造を疑われるようなことは何もないのに、記事で「捏造」と書かれて驚いたからです。なお、当時、本件スライド（甲5）の説明書きは池田先生が書いたものと思っており、また、面談で大江さんが私に話したように、TBSで池田先生が本件実験について「明らかに脳に障害が起きていて」「ワクチンを打った後、こういう脳障害を訴えている患者の共通した客観的所見が提示できている」とすれば（乙7の2、12頁）、実験結果について誤った理解で発表されていると思いましたので、「誤った理解」と書いています。「誤った理解」は、捏造でも研究不正でもありません。

私が面談でお話ししたのは、本件実験で使用したNF- κ Bp50欠損マウスの特性、すなわち、何もしなくても加齢によって自己抗体が生じることがあり、免疫染色の結果、緑色に染まることがあることを前提に、子宮頸がんワクチンを打ったマウスの血清について自己抗体を調べたところ、網膜や脳の海馬などで他のワクチンより数値が高く出る傾向が見られたことから、このパイロット実験の結果をもとに、引き続きさらに研究して、自己免疫疾患の素因がある女性については

子宮頸がんワクチンを打たないほうがよい場合があるとの情報を被接種者に与えることで、副反応のおそれがない女性が安心してワクチン接種できるようになるのではないかと、ということです。

ウェッジの記事（甲1）を読んだ後に気付いたのですが、もしかしたら、大江さんや村中さんは、本件スライド（甲5）に、「サーバリックスだけに」自己抗体が沈着したと書かれていたことから、文字通り、サーバリックス以外のワクチンを打ったマウスの血清には全く抗体反応がない、すなわちゼロで、サーバリックスだけに抗体反応があったと考えたのかもしれませんが。しかし、本件スライドの右上グラフの数値がゼロではないことからわかるとおり、ゼロではありません。だからといって、「サーバリックスだけに」との説明が誤りであるとも思いません。

前述のとおり、この NF- κ Bp50 欠損マウスは何もしなくとも加齢によって自己抗体が生じるマウスですから、どのマウスについても一定程度、自己抗体の反応が見られることはあります。ただ、マウス海馬、網膜のいずれについてもサーバリックスについて数値が高い傾向が見られ、ELISA法による結果（甲17, 38枚目）もこれを裏付けていたことからすれば、他のワクチンで一定程度見られた反応は非特異的なものに過ぎないと解釈できます。ですから、本件スライドの画像を例として示して、「サーバリックスだけに」自己抗体の反応が見られたと書いても、誤りであるとは思いません。

たしかに、これらのことがエビデンスに基づき科学的に証明されたというためには、今回のようなパイロット実験では足りませんが、これは研究の最終結果を公表する学会発表ではありません。厚労省研究班の1年間の活動報告資料として作成されたものであり、いわば途中経過の説明です。池田先生も厚労省も、そのようなものとして、池田班の1年間の活動内容を発表されたはずで、このような位置付けのものとして見ることは、宮川先生はもちろん知っていますし、医師であり厚労省研究班について取材されている村中さんであれば、よくご存知のはずです。

7 ウェッジの記事を読んで

ウェッジに掲載された記事（甲1）は、書く側の都合で、私の話したことを断片的、つまみ食いのように拾い上げるように書くことによって、私の話した趣旨をねじ曲げ、全体として私の説明と全く異なる記事に出来上がっていました。私は、

ウェッジに掲載された記事（甲1）を読んだ際、読者の興味心をそそらせるためのフェイク記事だと滑稽に思いました。

記事（甲1）では、私の発言に基づくかたちで、「手渡した資料には子宮頸がんワクチン以外のワクチンでも強く緑色に染まった画像が何枚もあった。しかし、池田教授は、子宮頸がんワクチンでよく光っている写真と他のワクチンで光っていない写真が組み合わさったスライドだけを発表したのだという。これは重大な捏造である。」と書いていますが、そのような事実はないことは、すでにご説明したとおりです。

私が塩沢先生に渡した資料（甲17）のうち、「核染色」「血清（自己抗体）」「海馬神経繊維」「融合」の4つに分けて、「血清（自己抗体）」の部分について、特異的な反応が見られる場合に緑色に光るよう設定し、血清を振りかけたマウス海馬の反応写真を並べたスライドは、本件スライド（甲5）に使われたもののみです。仮に、池田先生が塩沢先生からこの資料（甲17）を受け取っていたとしても、池田先生が選ぶ余地はありません。

本件スライド（甲5）が1匹のマウスのものであることについて、チャンピオンデータと宮川先生が言っていましたが、チャンピオンデータという言葉は学術用語ではありませんし、友人ゆえの冗談交じりの軽口と受け止め、面談では特に訂正を求めませんでした。しかし、だからといって、これを捏造だと記事に書くのは間違っていますし、意図的な悪意を感じます。宮川先生自身も、「「捏造」という言葉は、強すぎるような気がします。」（甲26）とメールで書いておられるように、捏造ではないことをわかっておられます。

NF- κ Bp50 欠損マウスを用いたことについても、宮川先生が私に疑問を述べたことなど無かったのに、記事では、「このマウスを使う妥当性は不明」（41頁4段目）と書かれ、記事後半は池田先生個人の悪口が並んでいて、まるで「白い巨塔」のドラマを思い起こさせるような読み物に仕立て上げられていると感じました。池田先生が、厚労省研究班の活動で名声を得てこれを医学部の権力争いに利用していると言わんばかりの書きぶりは、書いていて痛快でしょうし、さぞかし一般読者の興味を引いたことと思いますが、根拠無く捏造と書かれた側のダメージは計り知れません。

以上